

「簿記学」への招待

アカウントイング分野 教授 泉 宏之

皆さんは、日常生活で「簿記」という言葉を聞いたことがあると思います。でも、その内容について知っている方は少ないのではないのでしょうか？

簿記は、お金や物財等の動き（変化）を記録する方法です。それは様々な観点から分類することができますが、記録を行う際にいくつの記録を行うのかによって、①単式簿記（1つの記録）、②複式簿記（2つの記録、これを複式記入と言います）、③三式簿記（3つの記録）に分けることができます。そして、それらは歴史的にはこの順序で発展してきました。

三式簿記は、1980年代に、アメリカのカーネギーメロン大学の井尻雄士先生（日本人です）によって「発明」されたものです。従来の複式簿記に微分・積分の考えを援用し、拡張されたものであり、極めて理論的な簿記です。簿記を学ぶ者にとっては、大変に興味深く、多くの示唆を与えてくれる研究成果ではありますが、一般に利用されている訳ではありません。

通常、簿記と言った場合には、複式簿記を指すのが一般的で、皆さんも複式簿記を中心に学ぶことになります。複式簿記は、通説によれば、12世紀から14世紀にかけて、イタリアの商業都市の金融業者が行っていた記録方法から生まれたと言われています。三式簿記とは異なり、一人の天才が「発明」したのではなく、「発見」されたと言われることもあります。たとえば、ニュートンは木からリンゴが落ちるのを観て、重力という概念を発見したように、重力はニュートンが発見する以前から存在していたものでした。それと同様に、複式簿記（複式記入）は普遍的なものとして存在しており、発見されたと言われるのです。

この複式簿記を解説した最古の文献は、1494年にイタリアのルカ・パチョーリにより著された『ズンマ』（正式名称は『算術・幾何・比および比例全書』）とされています。これは数学書でしたが、その一部分に複式簿記に関する記述があり、そこには、本質的には現在の複式簿記と同様の解説がなされています。ルカ・パチョーリは修道僧であるとともに数学者でした。500年以上前から、複式簿記は存在し、今でも変わらずに利用されているのです。文化も科学技術も大きく変わったこの時の流れにあって、変わっていないということには驚きを感じます。

複式簿記は、その後、世界中に普及し、現在も世界共通で利用されており、「ビジネスの言語」と言われています。

日本に複式簿記を紹介した代表的な文献は、明治6年（1873年）に刊行された福澤諭吉による『帳合の法』です。これは、アメリカで簿記の教科書とされていたブライアント＝ストラットンの *Common School Book-keeping*（1871年）という文献の翻訳書です。複式簿記は、明治時代には、「読み、書き、ソロバン」と同様に扱われ、当時の小学校や中学校では正規の授業科目に取り入れられていたほどです。

日本での複式簿記の発展を考えると、第二次世界大戦の前後（1945年）で代表的な二人の学者があげられます。お一人は、東京商科大学（現在の一橋大学）の吉田良三先生です。吉田先生の『近

『世簿記精義』は、日本独自の簿記教授法を採り入れた日本を代表する簿記書です。もうお一人は、横浜国立大学の沼田嘉穂先生です。沼田先生の『簿記教科書』は、長年にわたり広く利用され、戦後の簿記教育に多大な影響を及ぼしました。沼田先生の高弟が、横浜国立大学名誉教授の大藪俊哉先生で、本学で簿記の講義を担当している私や原俊雄先生の恩師です。私と原先生も、この経営学部で、『簿記教科書』を用いて大藪先生から簿記の教えを受けました。

吉田先生や沼田先生の簿記は、理論簿記や正調簿記と呼ばれることがあります。これに対するのは財表（貸借対照表や損益計算書等の財務諸表）簿記と呼ばれるものかと思います。現在の社会では、複式簿記の記録に基づく貸借対照表や損益計算書等の財務諸表の作成とその公表が制度的に求められています。それらの財務諸表が作成できるように記録を行えば良いと考えるのが財表簿記です。

しかし、日本に限っても、そのような財務諸表を公表する制度が設けられたのは、第二次世界大戦後のことです。それ以前から、複式簿記は利用されており、その目的は、財産管理のためだと考えられます。古くは、財務諸表が存在していなかった複式簿記が生まれたという時代にあっては、財産管理こそが複式簿記の記録を行うことの目的でした。吉田先生や沼田先生の簿記は、この財産管理の目的を果たすために、日々の記録を疎かにせずに行うことを重要視していたと言えるでしょう。

簿記を学ぶ際には、単に覚える（暗記する）のではなく、皆さんには2つのことをしっかりと理解していただきたいと思っています。

1つは、複式記入、2つ記録することの意味・本質です。それがあからこそ、前述の貸借対照表や損益計算書といった財務諸表が、複式簿記の記録から誘導的に作成されることとなります。もう1つは、簿記一巡の手続です。先に示したように、現在では1年（さらには、半年や3ヶ月）に1回の財務諸表の作成が求められているため、これを1つのサイクル（会計期間）として簿記の記録は行われます。何をどのような順序で記録するのかを正しく身に付けることが、複式簿記の記録構造の全体像を把握することになります。

複雑な取引の難しい処理を覚えるよりも、現在における複式簿記の骨格であるこれら2つを理解していただきたいです。その理解が基礎となり、様々な処理に対応することが可能となるはずです。

また、簿記を学ぶ際には、手書き簿記（帳簿を用意し、手で記入する）を前提に説明がなされます。情報技術が発展した現在においては、コンピューターを利用して簿記が行われており、手書き簿記はほぼ行われてはいません。コンピューターが行ってくれるのであれば、簿記を修得する必要はないのでは、とお考えの方がいるかもしれません。

コンピューターはブラックボックスであり、その中で何が行われているのかを知ることはできません。たとえば、皆さんが利用する電卓も1つのブラックボックスです。電卓のキーは赤ちゃんでもお猿さんでもたたくことはできるでしょうが、その結果として生じた数字の意味を彼らは理解することはできないでしょう。皆さんは、四則演算の意味を理解しているからこそ、電卓の中で何が行われているのかが分かり、その結果として生じた数字を意味ある数字として認識できるのです。それと同じです。コンピューターの中で行われているのは、従来から手書きで行っていた記録方法と本質的には同じであり、そのプロセスを理解していなくては、出てきた結果を本当に理解することはできないでしょう。手書き簿記を学ぶことは、現在においても不可欠です。

企業を主な研究対象とする経営学部で学ぶ皆さんには、世界共通のビジネスの言語と言われる複式簿記を、是非とも修得していただきたいと思っています。